暮れ泥(なず)む

英 綾 子

一

緑色の硬い座面に揺られながら、織之亀吉は、四角い車窓越しに流れてゆく風景を、なんとなしに眺めていた。

海沿いに広がる民家の屋根の色。空を飛ぶ鴎。凪いだ広い海には、姿形、大小様々な軍艦や船舶が浮かんでいた。

遠く連なる嶺に、白く吹雪く雪のように見えるのは、山桜であろうか。

前の席に座る父は、じっと座したまま、眉間に皺を寄せて難しい顔をしていた。父の厳しい表情はいつものことなので、さして気にはならなかった。渋い桑の実色の着物には、海老に松の模様が描かれており、象牙色の帯を締め、同じ色の羽織を羽織っていた。背は然程高くないが肩がしっかりとしていて体格が良く、沈黙には岩のような重々しさがあった。

織之家の四男亀吉は、この春中学校に上がったばかりであった。桜が咲き初める束の間、父の商談に連れ立って、汽車に乗って広島へ行くこととなった。長男は陸軍に従事、続く次男三男もまた都合が悪く、末の弟である亀吉に白羽の矢が立ったのだ。と言っても、亀吉に出来ることと言えば、父の言い付け通りに動くことくらいであった。二の兄の鳳之が来ていたら、商いの見習い程度には役に立っただろうに。とはいえ、久し振りの遠出に亀吉の心は踊っていた。鮮やかな新橋色の着物にハンチング帽という、今日日気に入りの余所行きであった。亀吉は、美しい物や綺麗な物を見るのが好きだった。この着物も、一目惚れした生地を、地道に貯めた小遣いを叩いて買い、見様見真似、鋏で裁ち針で縫い仕立てたのであった。

大きな獣が息を吐き出すように汽車が停まり、父の後ろに続いて駅に降り立った。改札を通り過ぎて暫く歩くと、車窓から見えた海が眼前に広がっていた。穏やかな波打ちに、息を吸い込むと潮の香りがした。

海と山とに囲まれた港町は、亀吉にとって目に映る物全てが新鮮だった。前を歩く父を見失わないように気を配りながら、彼方此方に視線を投げると、好奇心は紙風船のように幾つも膨らんでは跳ねていった。

「亀吉」

嗜めるような父の声に我に返ると、緑青色の屋根瓦の連なる立派な屋敷の前にいた。どうやら目的の場所に辿り着

いたようだった。元よりしゃんと伸びた父の背筋が針金を通したように真っ直ぐになるのを見て、亀吉もまた居住まいを正した。

「織屋はん！ 待っとったで」

広い玄関に足を踏み入れると、屋号で親しげに呼びかける福々とした顔の初老の男に出迎えられた。

背は低く首は太く、明るい青竹色の着流しに濃い山吹色の帯をぎゅっと締め、裾からは鍛えられた手足が見えた。

「福寿さん」

父は普段よりも穏やかな表情と声で挨拶を交わした。福寿は半歩後ろに立つ亀吉にも人好きのする笑顔を見せた。

「坊ちゃんもよう来たね」

「倅の亀吉です」

「はぁ亀吉君！ 大きなったなぁ。昔、生まれたばっかりの君を見たことあるで」

「そうでしたね」

亀吉は覚えていなかったが、どうやら福寿とは初対面ではないようだった。

福寿には、この土地ではない、同郷の訛りがあった。父は普段の生活から商いまで言葉に訛りがない為、亀吉達もそれに倣っていたが、やはり故郷の言葉は、そこで暮らす人間にとっては親しみのあるものだった。

「僕んとこは商売でこっちに越して来てなぁ。でもやっぱり、織物は織家はんとこのがいっとうええわ」

「いつもご贔屓にありがとうございます」

どうやら父は定期的にこの港町を訪れているようだった。目の前の福寿という男は、往復分の汽車賃が無駄にならないくらいには上客ということだ。

福寿に案内され、二人は応接間に通された。福寿邸の外観は日本家屋で、玄関も廊下も和風だったが、応接間は洋室の造りになっていた。室内に並ぶ洋風の椅子には全て、落ち着いた常盤色の天鵞絨が張られ、天井には花の蕾のような、洒落た照明が吊り下がっていた。

父に無言で促され、亀吉は脇に抱えて持って来た鞄の中から織物をあれこれと、寄木細工の施された机の上に出して広げた。まるで珠のような絹の美しさに、福寿がほぅと息を吐いたのが分かった。

福寿は真剣な眼差しで、値踏みするようにそれらをじっくりと眺め始めた。穏やかな奥に鋭さが滲む、父と同じ商人の目だった。時折、福寿が父に言葉を投げかけ、父がそ

れに静かに答える、という遣り取りが続いた。
「亀吉、外に行っていなさい」
特にすることもなく蚊帳の外で、ぼんやりと空を見詰めていると、父にそう声をかけられた。二人の会話は難しく、子供の亀吉にとっては如何せん退屈だった為、願っても無い言葉であった。
「ああ、亀吉君、ちょい待ち」
嬉々として部屋を出ようとする亀吉に、思い出したように福寿が声をかけた。
「君、此処初めてやろ。山には入ったらあかんよ。この土地の山は、ミツルギ様の治める山やさかい」
「ミツルギさま？」
聞き慣れない、美しい響きだった。
この港町の地形を脳裏に思い描き、向かう汽車の車窓で見た山桜を思い出した。
「黙って言う通りにしなさい」
ぴしゃりと言い放つ父に、亀吉は反射的に頷いた。
ミツルギ様。
土地神か何かの御名だろうか。だとしたらと思い、膨らんだ紙風船のような好奇心が、ぽこんとまたひとつ数を増やした。

二

亀吉が生まれた織之の家は、京都で代々商家を営む商人の血筋だった。
亀吉は、同世代の子供に比べれば、質素ながら裕福な暮らしをしていると自負していた。食べる物に困らず、敷地の広い屋敷に住み、少ないながらも根気強く貯めれば小遣いで好きな物を買うことの出来る生活は、誰にでも等しく与えられる物ではなかった。
快活で優秀な陸軍軍人の長男、商いの才を持つ博識な次男、抜群に運動の勘が良い三男。歳の離れた兄達を順番に思い浮かべながら、亀吉はふと、侘しい気持ちになった。
織之の家には、本当は一人の女子がいた。物静かで優しい、たった一人の姉だった。
池に水仙の白い花が咲く静かな冬、姉は織之の家を出て行った。
理由は勘当同然で、亀吉も家の誰も、それきり姉とは会っていなかった。